に付けて，それを台座として幹の肌に附着している。その角度は直立，45度，平行等種によって異るが，帯蛹のものはない。中に puparium 囲蛹となるものがあるが，これは先に述べた異質者の一部である。*Alaena* の記録では蛹期 7—9 日，幼虫期 6 令93日，卵期12日である.

最近発見されたキマダラルリツバメの幼虫が，木の幹に住み，時として地衣，ミゾゴケの類をかじると云うので，我国でも生活史の似た種が出現したが，根本的には類縁は全く遠いもので，アフリカコケシジミの生活史は我々に全く珍らしいものである。(5/VII 1954)

——紹　介——

ヒメシジミ亜科の分類に関する新しい見解

MURRAY, DESMOND: The Genera of the European Lycaenidae (Lep.), The Entomologist **87**: pp.4～11, 23 Figs. Jan.-Feb. 1954

D. LESTON が編集者になって，白地の表紙の Entomologist が，1953年 1 カ年続いたが，11月号頃からどうやら行詰り，12月号が1954年の 6 月にやっと出て，ついに編集は N. D. RILEY の手に移り，表紙も永い伝統のある赤色に戻った. かくて87巻の 1 月号は 2 月号と合冊で (25頁にチヤンと 2 月号の表題がある～即ち1—24頁 1 月号，25—44頁 2 月号と云う次第) 7 月頃出た。

その中で MURRAY は，属の決定に ♂ ゲニタリアの重要性を強調し，PETHER のコレクションを入手した機会にベニシジミ，ミドリシジミ群以外の全ヨーロッパ産シジミチョウを再検討した。

その結果の中から日本に関係のある点をぬき出して見ると次の如くである。

Polyommatini　ヒメシジメ族

1. *Polyommatus* (s.st.) *argus* L.　ヒメシジミ
2. *P.* (s.st.) *optilete* KOCH. カラフトルリシジミ
3. *P.* (*Lycaeides*) *argyrognomon* BERGSTR.　ミヤマシジミ
4. *P.* (*Aricia*) *agestis* SCHIFF.　ハマベシジミ
5. *P.* (*Glaucopsyche*) (北米の *lygdamus* を検す)　カバイロシジミ属

〔附 *P.* (*Plebejus*) *icarus* ROTT. ウスルリシジミ〕

Maculineini　ゴマシジミ族

6. *Maculinea euphemus* HB.　ゴマシジミ
7. *M.* *arionides* STGR.　オオゴマシジミ
8. *Scolitantides orion* PALL.　ジョウザンシジミ
9. *Zizeeria* (インドの *karsandra* を検す)　ヤマトシジミ属
10. *Lampides boeticus* L.　ウラナミシジミ
11. *Cupido* (=*Everes*) *argiades* PALL.　ツバメシジミ
12. *Tongeia* (タイプを検せず)　クロツバメシジミ属
13. *Celestrina argiolus* L.　ルリシジミ

相当に驚くべき結果であるが，わずか 2 族にきりわけてないのは，イギリス人としてやはり，身近かの種類にとらわれた結果であろう。

江崎，白水両氏の「日本の蝶」との主要な相違点をあげると次の如くなる。

1. *Polyommatus* (タイプ *argus* L.) と *Plebejus* (タイプ *icarus* ROTT.) が完全に入れ代っている。
2. カラフトルリシジミが，ヒメシジミと同属になっている。
3. カバイロシジミ属が，ヒメシジミ族に移っている。
4. ウラナミシジミ，ツバメシジミ，クロツバメシジミ，ルリシジミの各属が，ゴマシジミ族に入っている。
5. ツバメシジミの属 *Everes* が，*Cupido* (タイプ *minimus* FUSSEL.) に合併されている。
6. ルリシジミ属の綴りが，*Celastrina* でなく，*Celestrina* となっている。
7. ヒメシジミ族の各属が，亜属として処理されている。

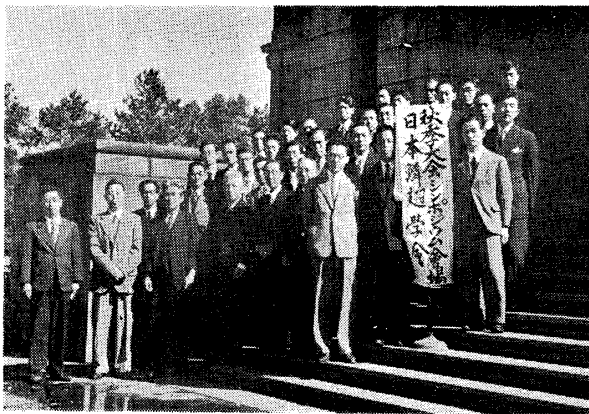
賛否如何にかゝわらず 23 の属のタイプ種の ♂ ゲニタリアを全部図示してあるので，見のがせない論文

であろう。彼の大きな結論は Polyommatini は均質的で1属（12亜属）にまとめられ，Maculineini は negative な特徴で結ばれ，異質的で合併すべき属は少ないと云うことに落付く。

著者 DESMOND MURRAY, F. R. E. S. がもし私の知っている DESMOND P. MURRAY と同一人ならば，彼はドミニカ会の修道僧としてヨハネスブルブに永く居り，南アフリカ連邦のシジミチョウ科のモノグラフ (1934) を書いた人である。このモノグラフの総論には，"馬鹿にされることは重々承知だが，この基本的学説（ラマルクの transformism）は全く誤りだと思う"。と云って，進化論中の "共通の祖先" と云う考えに真向から反対している。彼の議論の運び方は，稚拙にも近い自筆の幼虫図等と共に，極めてほゝえましく，何か普通の科学者と肌合いの違うあたゝかみを感じさせる。私にも 4, 5 年前イギリスから彼が交換を申込んで来たことがあるが，初対面にいきなり三角紙の折り方を伝授して来る様な極めて人なつこいところのある人であった。その時東洋のシジミチョウがほしいと云って来たのは，今回の論文のためであったかとも思われる。今回のゲニタリア図は，Camera lucida を使ったせいか，別人の様な筆致ではあるが，議論の運び方や図の署名等は確かに同一人である。

(26/Ⅸ 1954 磐瀬太郎)

總 會 記 事

10月21日午前10時より，東京上野の国立科学博物館会議室で，日本鱗翅学会秋季総会を開催した。日本昆虫学会大会の翌日のこととて全国の蝶蛾研究者が相集い，甚だ盛会であった。今回はシンポジウム型式で「種以下のカテゴリーの区分」というテーマで討論会を行った。磐瀬太郎氏を座長として，先ず白水隆，井上寛両氏の講演の後，それについて討論に移った。江崎会長よりは命名規約に関する有益なお話があったりして，活潑な意見が交されたが，懇親会の時間の都合で惜しくも午後2時で打切った。（詳細は別冊参照）

懇親会は箱根強羅柏荘に一泊して行った。食事や入浴もそっちのけで電燈に飛来する蛾の採集に熱中する者あり，先程の問題の続きを口角泡をとばして論ずる者ありで，深更2時まで愉快に談笑，翌朝散会した。

なおこの席上評議員会をも行い，別項の如く決定した。

日本鱗翅学会会報 "蝶と蛾"
日本鱗翅学会
大阪市東区今橋3丁目18 緒方病院内
振替口座京都15914番 電話北濱(23)3255 代
1954年12月15日

Published by
The Lepidopterological Society of Japan
c/o OGATA HOSPITAL, No.18, 3-chome,
Imabashi, Higashiku, Osaka, Japan.
15. Dec., 1954